

▶ 書籍一覧

▶ 英語

▶ フランス語

▶ ロシア語

▶ ドイツ語



JLPPの作品

[以前のページへ](#)

著者名: [水村 美苗](#)

本格小説

エミリー・ブロンテの『嵐が丘』に構想を得て執筆したという本作は、雑誌連載中から注目を集めていたが、単行本として出版されると同時に多くの新聞・雑誌で緻密な構成のケールの大き



長い序章で始まる本書には、作者自身を思わせる語り手「美苗」が登場し、ニューヨークに近いロングアイランドで過ごした少女時代を回想する。美苗は、そこで一人の日本人青年、東太郎に出会う。太郎には学歴もなければ縁戚もなく、それこそ極貧の身で単身貨物船でアメリカへ渡ってきたのだ。当初金持ちのお抱え運転手をしていた彼は、美苗の父親に見込まれて父親の会社で働くようになり、持ち前の勤勉さでまたたく間に頭角を現していく。後に独立し、事業にも成功、人もうらやむ大金持ちになるが、いつしか彼の噂は聞かれなくなる。

それから数年が経過し、美苗は日本の小説家としてアメリカの大学に招聘され、彼女のもとを訪れた元出版社社員という青年から、奇跡のような物語、つまり太郎の半生と彼にまつわる壮大な愛の物語を聞くことになる。青年は、軽井沢のある別荘で太郎に会い、別荘所有者の女性、富美子から太郎の半生を聞いたのだという。

富美子がかつて東京の宇田川家で女中として働いていた。その宇田川家の家作に住む宇田川家の元「車夫」のもとに、甥一家が妹の子供という太郎を連れて満州から引き揚げてくる。太郎を待っていたのは宇田川家の令嬢よう子との出会い、そして東京と軽井沢を舞台に二人の運命的な恋が始まる。そんな二人を富美子がじっと見守り、二人の恋によう子の美しい叔母たちがからむ。が、所詮それは身分違いのかわぬ恋であった。失意のうちにアメリカに渡った太郎は、よう子を思って必死に働き大成功を収める。再び日本に戻った太郎はよう子に再会し、二人の愛は再燃するが、結局は悲劇的な結末を迎える。

※日本語表紙: 新潮社版

[JLPP翻訳]



[以前のページへ](#)

☑ PAGE TOP